

平成二十五年 九月二六日〜一〇月一日

河内正孝 下 陶展

〔作家コメント〕

はるかなる草原と砂漠をたどり

きびしい風雪波浪をこえて渡来した

異文化香りたつ文物 豊かな古渡りの風景。

いいかえればそれはみほとけのあゆみの道

そして時をこえた今も私たちの心のなごみでもあります。

浪漫あふれる古渡りの源流をもとめ結んだ絹の糸を

たぐるように日々 想いをめぐらせ思索にふけております。

今回は古渡りの印度更紗文を彷彿した 土の更紗連作

陶偶と家庭雑器を心をこめてやきあげました。



河内正孝先生の作品には、初めて見る人でもどこか懐かしみや愛おしさを覚えられるような魅力があります。そして陶器ならではの和みや優しさといった緩やかな感情を抱かせてくれるのも特徴です。今回の展示には以前展示されていないタペストリーが登場しています。画廊の入り口正面に飾られたこの作品は、違う素材でありながらも陶器作品と通ずる感性がありそれは常に存在感を放っていました。この存在感には民族的な表現が組み込まれているからかもしれないかもしれません。そんな作品のルーツにもつながる異国からの精神や文化には様々なものが存在します。文化、技法、言葉、宗教といったたくさんのものがありますが、陶器やタペストリーもまた異国文化から伝承された一つでもあります。これらの全てにおいて共通することが、『人によって作られてきたもの』であること。陶器のレリーフや文様は国々により様々な意味やパターンがあり、変化もあります。そういった異国香るロマンと先生の感性がコラボレーションされ魅力の詰まった作品が展示されました。また、先生のもう一つの魅力は、陶器によって壁掛けの半立体作品を制作されていることです。こちらの作品には建物がモチーフとして使われていたり、動物や人の顔を用いたり様々なものがあり、絵画とは違う面白さがあります。